

俺は何でもないんだ。

乗った。

小學生の遠足か何かで澤山一杯だった。

腰掛ける事が出来ない。

大阪へ着いた。

俺は又下車した。

親戚へ行く積りはない、けれども體が骨抜き、鯨の肉のやうに疲れてゐる。

脚氣患者のやうに足が重い。

ひだるくて不可ない。

電車軌道に沿ふて、梅田からまつすぐに歩るく事は歩るいた。

何處へ行く宛もない。

遂々俺は犬の様に首を垂れて、道頓堀邊りまで歩るいてゐた。

腹が減つてゐるのでめしやへ行つても、刑事が先廻りしてめしも菜も「まだ出来やしまへん」